個が生きる社会科学習と評価

富村　誠

1．はじめに

教育課程改訂の時期である。新学習指導要領に関わる刊行物や研究物の中に，「次の世代の将来を見つめて」「21世紀への教育を求めて」「21世紀に生きる子どもの育成をめざして」といった論述を目にすることが多い。教育は，「個人あるいは特定の機関が，一定の理想あるいは価値を志向して，未成熟な子どもや青年を指導して，社会の維持と発展のためにする意識的な活動」[1]とも言い表せるだけに，目指す子ども像や人間像，つまり『どのような子どもを育てるか』を設定する営みは必要不可欠である。その理想や価値に照らして現在の子どもたちの問題状況を分析する論述[2]が多くみられるのも，同様な理由によるものであろう。

今回の改訂は，第六次にあたる。その度毎に，目指す子ども像や人間像が設定され，当該時期の子どもたちの問題状況が分析されてきているわけである。反面，実施した教育実践の成果，つまり『どのような子どもが育ったのか』について改訂毎に実践に即して検討されることは，少なかったのではなかろうか。「五無主義の若者」とか「新人類の出現」などと総括的に言い表すことは，教育評論家の常である。が，我々には，教育実践家としての立場からの検討が求められる。

日々の教育実践が単に新たなスローガンを掲げることにとどまり，目標や内容は新しくなっても実践は変わらないものとなりがちであるという指摘[3]がある。その原因として，実施した教育実践の成果を次の実践に生かしきれていないことが挙げられよう。では，今までの教育内容や方法でどのような子どもが育ったのか，今までの内容の取り扱いや方法の中から何を生かして何をどう改善するのか。これらの問題を探究していくことは，これからの社会科を構想する上で，基本的な課題の一つであり，教育実践家としての責務でもあると考えられる。

このような問題意識から，本稿では，大学生が小学校時代の社会科学習に対してどのような意識を抱いているのかを明らかにし，当該時期の社会科実践と関連的に考察することを通して，社会科授業に対して抱くプラス面およびマイナス面それぞれの意識の背景を探求していきたい。

そして最後に，プラス面の背景としての「多様な学習活動」を社会科授業に位置づけながら，マイナス面の背景としての「評価方法」をどのように改善していくことが必要なのかについて，評価事例をもとに若干の提案を行っていきたい。

2．大学生が抱く小学校社会科学習への意識

(1) 意識調査の年月と対象人数

・1988年12月

・広島大学学校教育学部３年次生　209名

(2) 調査内容と結果

①社会科学習のイメージ（人数）

評定 / 項目	とても＋		普通		とても－	計
好き・嫌い	13	86	67	40	3	209
得意・苦手	9	77	86	32	5	209

②日常の学習の進め方（延べ人数）

先生の話を聞きながら，まとめる。	125
テレビ放送を見ながら学習する。	98
グループや一人で資料を集めて調べる。	84
みんなで話し合い，考えたり調べたりする。	76
先生に資料を見せてもらって調べる。	60
見学に行って，調べる。	59
地図や表などを自分で作って，調べる。	57

③好き・得意だったわけ　　（回答数：総回答数は227）

《学習内容》	44	**《授業・先生》**	11
・歴史に興味があった	23	・おもしろかった	10
・身近で分かりやすい	12	・みんなが活躍できた	1
・歴史と地理に興味があった	5		
・地理に興味があった	4	**《学習評価》**	31
		・テストの点が良かった	21
《学習方法》	73	・成績（通知表）が良かった	10
・自分で調べる	22		
・外へ見学に行く	21	**《その他》**	68
・地図を見たり作ったりする	12	・興味深かったから	20
・テレビを見る	6	・覚えておけばテストができる	18
・スライドや写真を見る	3	・覚えることが好き	16
・物を作る，育てる	3	・知識を多く持っていた	6
・教科書をまとめる	3	・覚えるだけで考えなくていい	5
・表やグラフを作る	3	・知らないことが分かる楽しさ	3

＊「とても好き・得意」「好き・得意」165名（延べ数）の記述の集計

④嫌い・苦手だったわけ　　（回答数：総回答数は107）

《学習内容》	41	・学習の方法や目的がよく分からない	3
・覚えることばかり	19	・発表が苦手	2
・はっきりと答えが出ない	9	・先生の質問が分からない	1
・身近に感じられない	6	**《授業・先生》**	5
・興味がわかない	4	・楽しくない	5
・歴史が苦手	1	**《学習評価》**	19
・地理が苦手	1	・テストの点が悪かった	17
・ややこしい	1	・ノートの使い方を叱られた	1
《学習方法》	16	・ほめられたことがない	1
・話を聞くだけで活動がない	7	**《その他》**	21
・地図が面倒くさい	3	・覚えるのが苦手	21

＊「とても嫌い・苦手」「嫌い・苦手」79名（延べ数）の記述の集計

⑤印象に残っている社会科学習　　（回答数：総回答数は242）

【調べる学習】	69	**【見学】**	33	**【社会見学】**	22
・色々な土地のくらし（４年）	28	・消防署	7	（バス利用による地域の施設見学）	22
・歴史（６年）	27	・郵便局	4		
・市の歴史（３年）	4	・古墳	3	**【テレビ学習】**	21
・石碑調べ	3	・魚屋，青果市場，下水処理場，浄水場	各2	（学校放送利用）	21
・古老の聞き取り	3	・駅，給食室，魚市場，ダム，発電所，ごみ処理場，給食センター，みかん選果場，用水路，公民館，石炭資料館	各1	**【体験的な学習】**	12
・買物調べ	2			・田植をする	3
・学校の昔調べ	1			・筆をつくる	3
・米の産地調べ	1			・パンをつくる	2
				・歴史劇をつくる	2
【工場見学】	47			・お店やごっこ	1
・パン工場	17	**【作業活動】**	32	・葉書を書いてポストに投函する	1
・自動車工場	7	・地名さがし	9		
・製紙工場	3	・日本地図作り	6	**【その他】**	6
・蒲鉾工場	3	・町内地図作り	3	・６年の学習が時間不足気味だった	3
・おかし，牛乳	各2	・白地図作業	3	・夏の自由研究	3
・ニット，家具		・商店街地図作り	2		
カステラ，造船		・立体地図作り	2		
やすり，ソース		・地球儀作り	2		
おかき，靴		・年表作り	2		
段ボール，醤油		・グラフ作り	2		
納豆，豆腐		・県地図作り	1		
ジュース	各1				

＊ 209名の記述（242項目）の集計

以上の結果から，学生たちは，自らの社会科学習経験をもとに次のような対照的な社会科学習への意識を抱いていると考えることができる。

a **「見学し調べてまとめる社会科」**…社会科は活動する教科であり，見学・調査・作業・体験など多様な学習活動をするものだとする意識である。「活動が面倒」なため嫌い・苦手だと意識する回答(④)は僅かであり，「活動ができた」ため好きだったとの回答(③：227回答中73回答）が多い。また，印象に残っている社会科学習は，好き・嫌い及び得意・苦手に関わりなく，この活動する教科としての捉え方であり(⑤)，プラスイメージの強い社会科学習への意識であると言えよう。

b **「テストのために覚える社会科」**…社会科は暗記教科であり，暗記次第でテストの点数や評定が良くも悪くもなるものだとする意識である。「覚えるのが好き」か「覚えるのが嫌い」かという

差異が，そのまま，好き・嫌い及び得意・苦手の意識に大きく反映されている（③④）。特に，社会科の学習が嫌いまたは苦手だったという回答の半数以上（④： 102回答中57回答）は，このテストのために覚える教科としての捉え方に対する抵抗感があり，マイナスイメージの強い社会科学習への意識であると言えよう。

3．大学生が抱く小学校社会科学習への意識の背景

このような意識を抱く大学生が小学校で学習したのは，昭和40年代後半から50年代前半の時期にあたる。当該時期は，昭和30年代の実践を契機にした「知識の系統的学習が一般化する中で生じてきた，教材過剰，転移しない大量の知識の詰め込み，興味・関心や知的好奇心を喚起しない面白くない授業といった問題が教育現場で意識されはじめ，これらの問題を解決しようとする多様な授業改造」[4]が課題とされた時期である。

昭和44年版小学校指導書社会科編において「学校教育では，学習する内容の多きを求めるのではなく，むしろ社会の基本的なことがらを考え，理解するために必要な基礎的能力の育成を心がけるべきである」[5]とされ「今後の社会科指導において，適切な学習活動や資料の精選に配慮し，個別指導の徹底を図るなどの努力が大いに必要とされる」[6]と改善の要点が説明されているのは，この課題に応えようとしたものであった。また，改訂の前後において，範例学習[7]，学び方学習[8]，ものをつくる学習[9]，主体的学習[10]，検証学習[11]，ＫＪ法学習[12]，探究学習[13]，発見学習[14]など多様な学習指導法が提唱され始めているのは，同様に，知識の系統的学習を克服し能力を育成するという当該時期の課題解決を目指したものと捉えられる。

このようにみてくると，大学生が抱く小学校社会科学習への意識の背景として３つのものを考えることができよう。[15]すなわち，第１は，多様な学習指導法が提唱され多様な学習活動が実際に授業に取り入れられていったことである。第２は，学習活動が，目標の「さまざまな理解，能力，態度，愛情」[16]の中の「理解」，特に「知識」を習得させる手段となってしまったことである。第３は，学習活動の評価が，教師・児童ともにペーパーテストに代表される結果主義や成果主義に依存したまま実施され続けてしまったことである[17]。

先の「見学し調べてまとめる社会科」というプラス面の強い意識は第１を背景とし，「テストのために覚える社会科」はそのマイナス面の強い意識の背景を第２・３に持っていると言えよう。

以上考察してきたことを簡潔に言えば，昭和43年の教育課程改訂は，「いくら学習活動を工夫してみても，その評価が成果としての理解（知識）に着目して行われるならば，子どもの社会科学習への意欲を減じさせる」と，我々に，大学生の意識を通して語りかけているのである。

4．個が生きる社会科学習と評価

平成元年３月に告示された『小学校学習指導要領』の総則で「(9)指導の<u>過程</u>や成果を評価し，指導の改善を行うとともに，<u>学習意欲の向上に生かすよう努める</u>こと」[18]と記され，昭和33年版・43年版・52年版に一貫していた「指導の成果を絶えず評価し，指導の改善に努めること」に変更が見られるのは，以上の考察結果からすると大きな意義があると考えられる。そして，『小学校指導書教育課程一般編』で示されているように，「いわゆる評価のための評価に終わることなく，児童一人一人の学習が成立するための評価」[19]つまり「教師による評価とともに，相互評価や自己評価など適切な方法」[20]を重視した社会科学習創りに努めていくことが肝要だと言える。

では，「個々の児童に社会的なものの見方や考え方が養われるよう」[21]「児童に調べる学習を奨励し，観察・資料活用の活動などが積極的に行われるように」[22]するため，どのように指導の過程を評価し，学習意欲の向上に生かすのか。以下では，達成目標と評価基準を明確に設定することを通し指導過程での子どもの学習状況や考え方を診断した事例，個々の調べ学習に対する相互評価を位置づけることを通して達成感を持たせていった事例をもとに，その試みを述べていく。

(1) 評価事例Ⅰ　達成目標と評価基準を生かした事例－3年「豊町の人々のくらし」[23]－

「児童一人一人の学習が成立するための評価」とは，何が分かり何が分からないのか，何ができ何ができないのかについて指導の過程で状況を把握できることである。そのためには，何を分からせ何ができるようにさせたいのかについて指導のねらいを明確にしておくことが必要である。

① 本時の目標

豊町の人々の買物は，船の利用により他地域と深く結びついていることを理解させる。

② 本時の達成目標と評価基準（本稿では観察・資料の評価基準だけを掲載し他は省略する）

知識・理解　…　豊町の人々は，1日60便もの船で品物を買いに出たり，出張販売者から品物を仕入れたりしていることがわかる。

観察・資料　…　資料から，豊町の人々の買物の様子を具体的に読み取ることができる。

＋　資料の正確な読み取りに加え，豊町の生産活動との関連に気づいている。

0　資料を具体的に読み取ることができ，正確である。

－　資料の読み取りが不十分で，豊町の人々の買物の様子が具体的にとらえられない。

思考・判断　…　船便の少ないころの豊町の様子を，消費生活・生産活動・地形などの視点から考えることができる。

関心・態度　…　資料をもとにして意欲的に調べたり，自分の読み取りや気づいたことを進んで発表したりする。

③ 授業の展開と評価の概要

ア　豊町の人々の買物の様子を予想する場面

学習過程	資料	留意点	評価
1 豊町の人々の買物の様子を予想する。 大長港：1日60便の船／今治の商店広告 新聞広告：竹原市のもの／今治市のもの／豊町内のもの 他地域／島内 ※2以降は省略	◎中心資料 ・補助資料 ◎大長港の時刻表 ・大長港待合室の広告の写真 ・新聞広告の実物	1　本時の問題に迫らせるため，左記資料を提示し，「豊町の人たちはどのような買物をしているのだろう」と発問した。 各資料の読み取りと子供の気づきを考える場とするため，個別作業(10分)を設けた。	㊟－②机間巡視して，一人一人の作業状況を観察した。 作業プリント　過程1 (－)の子供：・「時刻表」の15便ほど行き先を分類する作業が不十分な子供。←算数での分類整理との関連。正の字で教えるよう指示。・「広告」の読み取りが不十分な子供。←個別作業時に，所在地に着目するように呼びかけた。 (0)の子供：・正確な読み取りが途中の子供。↑賞賛を与える。・読み取りの終了している子供。↑商店分布図・瀬戸内海地図で，広告の所在地を押さえておくように指示した(先行学習)

学習問題に目を向ける読み取りの場面では，子ども一人ひとりの状況に応じた働きかけが大切である。右は，達成不十分（－）・達成（0）と診断した子どもへの手だてを示したものである。早期に子どものつまづきを発見する上で，机間巡視は欠かせない。その際，「机間漫歩」「机間遊泳」になるか否かを分けるのは，評価基準を明確に設定するか否かにかかっていると考えられる。

イ　それぞれの考えを出し合い，消費生活の特色を理解する場面

《島にしなものを売りに来る出ちょうはん売》

みなさま，おなじみ，岡山の坂本衣料店でございます。

大変，おいそがしい時におじゃまいたします。岡山の坂本衣料店が本日，出ちょうはん売にまいりました。

作業ズボン，学生ズボン，幼児ズボン，もんぺ，作業服，防寒着など，特価品(安いもの)をとりそろえ，ただ今，いつもの高橋さん宅で，はん売いたしております。高橋さん宅で，明日の昼すぎまでおじゃまいたします。

〔考えよう〕① 上のほうそうの中で,「豊町にぴったりだな」と思う商品に，線を引きなさい。

② あなたが,その商品を「豊町にぴったりだな」と思ったわけを，先生に書いておしえてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

それぞれの考えを出し合い，本時のねらいに高めていく発表の場面では，多様な見方や考え方を全員の中に示していく働きかけが大切である。本時では，左のプリントへの線引き箇所とわけの記述を診断し，指名に際して多様な考えが出し合われるように配慮した。

机間巡視の結果,「作業ズボン，もんぺ，作業服」に線引きした子どもが多いものの，全部の商品に線引きした子ども,「特価品」という言葉だけの子どももいることが診断でき，指名に生かしたわけである。少数意見であったが,「豊町には服とかの店があまりないし，あっても品数が少ないから」全部の商品だとする考えや「みかん山の仕事で服がすぐ汚れてしまうから」特価品だとする考えは，学級全体に肯定的に受けとめられていった。

(2) 評価事例Ⅱ　達成感を持たせる相互評価を生かした事例－4年「いろいろな土地のくらし」－

さんへ
一つ一つきちょうめんに調べていねいに書きうつしていることがわかりました。色の使い方などとてもうまいと思いました。
(　　より)

さんへ
図や、文がうまく整理されて、よく分かります。すばらしい。
(　　より)

さんへ
とても字がきれいでわかりやすくかいてありました。色がきれいにぬってあるのがよかったと思います。
(　　より)

もう少し思ったことをかばんとかけばよかったなあと思いました。だからこんどから思ったことをいっぱいかこうと思います。

子ども個々が課題を持ち，自分なりに調べまとめていく学習に対しての評価は，どのようなものであることが望ましいのであろうか。調べたものに教師が朱書を加えて賞賛する，調べたものを掲示し他児との対話を促す，調べたものを発表会で報告し合う，など様々な方法が行われている。いずれも，調べた内容そのものに対する評価ではなく，調べた達成感に対する評価であるところに特色が見られる。

左は，調べたノートをグループで回覧し，気づきを寄書きしたものの一部である。中には手厳しい言葉が加えられることもある。しかし，共に資料を探し，まとめ方を教え合いながら学習してきた仲間からの一言である。

教師だけが子どもを診断し評価するのではない。学習意欲の向上に生かすため，相互評価は有効な手だてのひとつと言えよう。

5．おわりに

「私が初めて授業をした時，一人の生徒が手を挙げて質問した。“先生，いま話されたことも試験に出るのですか？”ああ，この生徒はよく覚えられないので，こんなことを言うのだな，とその時は思った。が，しかしである。ある日，学級の生徒に学校へ何の為に来ているのかをたずねてみたところ，生徒たちは，口をそろえて“勉強したことをよく覚えて試験でよい点を取って優等の成績をもらうためです”と言うのだ。このような考えをもっている生徒のままにしておいては，とう

てい真の教育を行うことは難しく，試験向けの学問を生徒に学問と認めることとなり，ひいては今主張されているところの開発教授のようなものも徒労になってしまう」[24] 百年前，暗記・暗誦に陥っていた教授法を，子どもの自発性にもとづく成長に期待し具体的な事物を仲立ちとした教授へ改善しようとした教師が寄稿した文の一節である。

百年を経た今，「試験」はテストになり，「教授」は学習指導となった。しかし，「評価」はどうなのであろうか。

註

1）五十嵐・大田・山住・堀尾『岩波教育小辞典』岩波書店　1982　57頁
2）社会科に関わる論述としては次のものがある。①小西克美「授業調査にみる指導の問題点」（『生活科で社会科はどう変わるか』明治図書　1988）②今谷順重「急激な社会変化の中での子供像の変貌」（『新しい問題解決学習の提唱』ぎょうせい　1988）など
3）西山啓「学習のめあてを追求する授業づくりを考える」（『初等教育』広島大学附属東雲小学校教育研究会　39号　1987）6～11頁
4）小原友行「教育実践の思想と運動」（奥田真丈監修『教科教育百年史』建帛社　1985）1061頁
5）文部省『小学校指導書　社会編』大阪書籍　1979　3～4頁
6）同書　4頁
7）1965年に三枝孝弘が『範例方式による授業の改造』（明治図書）を刊行している。
8）1966年に野瀬寛顕が「日本学び方研究会」を発足させている。
9）1967年に東京の小学校教師津久見宣子が実践に取り組み始めた。
10）1968年に村上芳夫が『主体的学習入門』（明治図書）を刊行している。
11）1968年に鈴木喜代春が『社会科検証学習』（国土社）を刊行している。
12）1970年に川喜田二郎と田中実が『ＫＪ法による社会科学習』（明治図書）を刊行している。
13）1972年に研究団体「社会科教育研究センター」が結成されている。
14）1972年に水越敏行が『社会科発見学習の展開』（明治図書）を刊行している。
15）小原友行は，前掲書のなかで，「教科書の内容の量的拡大」「受験戦争の激化」「目標と授業構成のずれ」のため，当該時期の課題は解決されずより深刻な課題になっていったと指摘している（1068頁）。
16）文部省『小学校指導書　社会編』大阪書籍　1979　2頁
17）『小学校学習指導要領　社会』（文部省　1978）の目標4には「社会生活を正しく理解するための基礎的資料を活用する能力や社会事象を観察したりその意味について考える能力をのばし，正しい社会的判断力の基礎を養う」とある。「社会生活を正しく理解するため」という文言は，内容の精選を意図していたと解されるが，他方，理解に向けた能力の育成・目標内での理解の優位性を強調することとなったとも解される。「学習する内容の多きを求めるのではない」としながらも最終的には知識を問うテストに依存してしまったのは，そのためであろう。
18）『小学校学習指導要領　総則』（文部省　1989）4頁（引用文中の下線は筆者）
19）文部省『小学校指導書　教育課程一般編』ぎょうせい　1989　71頁
20）同書　71頁～72頁
21）『小学校学習指導要領　社会』（文部省　1989）37頁
22）文部省『小学校指導書　社会編』学校図書　1989　9頁
23）拙稿「海にかこまれた豊島（大崎下島）の人々のくらし」（熱海・中野・高野編著『小学校観点別達成度評価を生かした授業実践』図書文化　1984　142頁～157頁
24）信濃教育会『信濃教育会雑誌』国書刊行会（1982復刻）42号　1890年の論文　29頁～30頁